
VI. おわりに

本書では、チュー渓谷考古学プロジェクトによる調査成果をまとめるとともに、その結果に基づいて、チュー渓谷西部における都市定住民と遊牧民が織りなした歴史的・文化的動態について論じてきた。本章では、これまでの内容を総括した後に、今後の展望について触れておきたい。

2018～2022年の3シーズンに亘り実施した本プロジェクトは、これまでに精細かつ包括的な遺跡分布研究が存在しないチュー渓谷西部にその焦点を絞った。その目的は、チュー渓谷における中世植民都市の形成とそれに伴う東西交易路（天山北路）の発達を、在来の遊牧社会との関係の中で理解することであった。天山山脈北麓に広がるチュー渓谷はステップ地帯の南縁に位置しており、天山山脈とステップ地帯を南北に季節移動する遊牧民にとって、格好の経由地あるいは逗留地となっていたと考えられる。6世紀のソグド人進出以降は中央アジアにおける都市定住社会の北限に組み込まれたことにより、同渓谷における在来の遊牧民と都市定住民の密接な関係が始まった。都市定住民は天山北路による東西交易を推進し、ここに至って、遊牧民による南北移動軸と都市定住民による東西移動軸が交わる結節点という歴史的・社会的・文化的に重要な意義を有するチュー渓谷が出現したのである。こうした歴史的事情にもかかわらず、6世紀以後のチュー渓谷における調査研究は概ね天山北路沿いに連続的に所在する中世都市に専らの関心を傾け、それ以前から存在していた遊牧民に関わる痕跡を積極的に見出してこなかった。加えて、チュー渓谷の中でも、天山北路やその支線の経路から大きく外れた地域のほとんどは未調査のまま残されており、中世における都市化、シルクロード交易の展開、定住・遊牧社会の関係といった歴史的・文化的に重要なトピックを論じる以前に、そうした議論の根拠となる地域文化史に関わる基礎データの蓄積を実施する必要があった。

上記の経緯を背景として計画したチュー渓谷西部の考古学踏査では、在来遊牧民の南北方向の季節移動や東

西交易路の時期による路線移動の可能性を意識して、南北に長大な調査対象地域（東西約35 km、南北約50 km、面積約1,270 km²）を設定した。しかしながら、時間的・人的制約により調査対象地域全域に対して悉皆的調査を実施することは難しく、39%未満（500 km²未満）の面積に対してのみ重点的な遺跡記録を遂行できた。なお、このように調査面積は大幅に減少したわけであるが、調査区設定の当初の意図を十分に考慮し、南北に展開するように考古学踏査を実施した。

考古学踏査の結果、調査対象地域内において計94遺跡を記録した。これらには既知の14遺跡が含まれており、このうち6遺跡はかつて東西交易路沿いに存在した拠点都市・町である。これらの既知の遺跡も合わせて全体の分布傾向を見ると、調査地域北西部（Zone I西部）と南西部（Zone IVb）における遺跡の集中が看取された。この傾向は調査密度を反映している一方で、Zone I西部には拠点都市シス・トベ（N005）が存在し、また、キルギス山脈北麓のZone IVbは農地開拓以前の地勢を残していること等、部分的に元来の分布傾向を示していると考えられる合理的な根拠がある。遺跡種別に着眼すると、葬祭遺構が全体の41.0%を占め、これに次いで生活遺構（全体の37.1%）が多い。葬祭遺構はクルガンが全域的に、墓地・単独墓はZones I・IVbのみに分布する。また、生活遺構の約70%がZone IVbに集中する傾向を見出した。なお、居住址のほとんどはZone Iに所在している。都市や町を除く多くの場合、現地表面で遺物を採集することができなかったため、精密な時期決定は困難を極めた。そこで主に遺構の規模・構造・立地に着目し、およそその時期を推定した。遺跡数が他に比べて多かったのは、鉄器時代前期と中世後期であった。こうした努力にもかかわらず、36件の遺跡の時期は不詳とせざるを得なかった。

時期別の遺跡分布傾向の概略を改めて示しておきたい。まず、本プロジェクト最古の遺跡として、後期青銅器時代（カラス文化、前1000～800年頃）の土器散布

地 (N018) が認められた。N018 は Zone I 東部に所在するが、大チュー運河建設時には同様の痕跡が確認されており、チュー溪谷内に当該期の集落や墓地が少なくとも数ヶ所は存在したのであろう。鉄器時代前期 (前 8 ～ 前 3 世紀) には 13 件のクルガンが調査地域全域に分布するが、標高 800 ～ 900 m に集中的に築かれる傾向がある。また、標高が上がるほどに墳丘径が小さくなる顕著な傾向も見出せた。鉄器時代後期 (前 2 ～ 後 5 世紀) には円墳群 9 件が認められ、このうち 8 件は山麓部の Zone IVb に所在する。かつて沖積平野内のカラ・バルタにおいて同時期の集落址が検出されたことに鑑みて、山麓部と平野部を季節的に移動した遊牧集団の存在が推測される。中世前期 (6 ～ 8 世紀) には 3 つの都市 (シス・トベ、アク・トベ・スレテンスコエ、ペロヴォドスコエ・クレポスト) が築かれ、東西交易が開始されたとみられる。シス・トベとペロヴォドスコエ・クレポストは標高 700 ～ 800 m の平野部に立地しており、これより北方に存在した湿地帯より南で、かつ、在地の遊牧民の生活領域の一部であった山麓部と十分な距離がとれる肥沃な地点を意識的に選んだと考えられる。また、シス・トベ周囲の水系沿いには 8 基の追悼遺構が認められ、都市定住民と遊牧民が相互に距離をとりながらも近傍で生業を営んだ状況が窺える。この状況は玄奘による記録 (『大唐西域記』巻一) とも符合する。中世後期 (9 ～ 12 世紀) には都市定住社会が大幅に拡大し、長大な城壁を有する都市の周囲に町や要塞・望楼が一定の間隔で配置されるようになった。なお、こうした配置から外れて見つかった町 N040 は推定存続期間が 9 世紀後半から 10 世紀後半と短く、周囲に目立った遺構も認められないため、北方に抜ける交易路を新たに開拓しようと試行錯誤した痕跡ではないかと考えられる。なお、12 世紀以後の山麓部には城壁を持たない在地の定住集落タシュ・マザール (S026) が造られ、近傍の遊牧民と共生関係にあったことは想像に難くない。近世・近代 (15 ～ 19 世紀) には、ペロヴォドスコエ・クレポスト (N006) における小居住址、耕作地縁辺に所在する単独の建物遺構、3 件の墓地が認められたものの、遺跡分布は概して希薄である。14 世紀のモンゴル帝国による侵略以後、都市・町が放棄されて、小村落のみが散在した状況を表しているのだろう。

36 件の時期不明遺跡 (構成遺構数 69 基) のうち、26 件の遺跡は 41 基の囲い込み遺構を含んでいた。囲い込み遺構は遊牧民による痕跡と考えられ、チュー溪谷西部の定住 - 遊牧社会関係を考察する上でその年代観は欠かせない。そこで、これらの囲い込み遺構の一部と他遺

構との重複関係を手掛かりに、型式変遷の復元を試みた。楕円形囲い込み遺構を円形囲い込み遺構が壊すこと、楕円形囲い込み遺構と円形単独墓が共伴すること、また、楕円形囲い込み遺構と円形囲い込み遺構の空間分布の差に着目し、また、シス・トベ外郭 (10 ～ 12 世紀に成立) 内に円形単独墓が存在することから、楕円形囲い込み遺構及び円形単独墓を 10 世紀以前に位置づけた。これに伴い、円形・隅丸矩形囲い込み遺構を 10 ～ 12 世紀以降の成立と見て、大型矩形囲い込み遺構を近世以降の所産と推定した。さらに、山麓部で確認した半円形及び石造円形囲い込み遺構 (S045-1, S041) を、その風化の進行具合から鉄器時代後期に位置づけた。

時期を推定できた遺跡と、時期不詳に含まれていたが仮の型式変遷を復元した囲い込み遺構を組み合わせると、定住 - 遊牧社会関係の変遷が浮かび上がってきた。鉄器時代後期には、おそらく南の山麓部と北の平野部を結ぶ季節移動経路が確立しており、この経路上に円墳群や囲い込み遺構が残されたと考えられる。中世前期には西方から植民したソグド人により拠点都市が建設された。特に大きな拠点都市シス・トベ (N005) の周辺には、突厥に帰される追悼遺構が分布し、また、同時期の可能性がある楕円形囲い込み遺構も平野部に多数存在した。楕円形囲い込み遺構はステップが卓越する山麓部にも一定数分布し、同地で放牧を行っていた遊牧民の存在が窺える。これらを組み合わせると、当時存在したトルコ系遊牧民はそれ以前の南北 (垂直) 方向の季節移動を踏襲しており、その経路上に存在した都市定住民とは協調しつつも相互不干渉の潜在的緊張関係にあったと推測される。中世後期には平野部において都市域の拡大と居住址数の増加が見られ、東西交易のさらなる活発化が窺える。他方で、10 世紀以後に位置づけた円形囲い込み遺構はそのほとんどが山麓部に分布し、平野部ではほぼ見られない。この現象は、10 ～ 12 世紀にチュー溪谷を支配したカラハン朝が都市定住社会への関与を強めた結果、と理解することもできる。通常の垂直方向の季節移動では南の山麓部あるいは山岳部と北の平野部の双方に一定数の痕跡が残されるとすれば、円形囲い込み遺構が平野部に存在しないことは不可解である。しかし、平野部への移動時にカラハン朝のトルコ系遊牧民が都市内に居住したとすれば、この現象も説明がつくだろう。東西国際交易を手中に置くために、カラハン朝はあえてこのような半定住策を採ったとも解釈できる。近世・近代には、チュー溪谷西部の各所に定住小村落がcaろうじて営まれ、山麓部を中心に遊牧民が活動する状況となったと考えられる。

両者の関係については不詳である。

以上、本プロジェクトによる限られた調査成果に基づいて、チュー渓谷西部における文化動態の通史的復元を試みてきた。依然問題として残り続けているのは、囲い込み遺構をはじめとする小型遺構の年代であろう。本プロジェクトで確認した小型遺構では遺物をほとんど表採できず、年代を確定するための材料に欠く。この状況を解消するために、本書で分類した各種類の遺構に対して試掘調査を実施することが望ましい。試掘調査により、遺物の回収と構造の解明が期待できる。また、各小型遺構の機能の解明も大きな課題である。本プロジェクトでは、建物遺構を除く小型遺構を遊牧民の所産と推定して、調査研究を推進してきた。考古学踏査による現地表面での観察では、これらの遺構を定住民に由来する施設（例えば、住居や倉庫等）と積極的に評価する要素が欠如していたためであるが、発掘調査と採集土壌等の分析によって、これら遺構の機能も確定する必要があるだろう。本

プロジェクトは広大な地域を調査対象としたが、将来的にはチュー渓谷西部の各地で悉皆的な調査を実施し、現時点で残されている遺跡を十分に記録することが望まれる。過去 60 年間に、比較的大型の遺跡でさえも農地開拓や宅地開発により削平されてしまった。史跡保護の法的効力が不十分な状況をしばらくは克服できないのであれば、せめて記録保存という選択肢により、チュー渓谷西部における文化財の現況を将来に遺す責務を一研究者としては感じざるを得ない。また、こうした記録を残すことができれば、チュー渓谷西部全体の文化的動態をより精密に把握することもできるようになるだろう。上記の課題が解消されて、天山北路の一翼を担うチュー渓谷西部の歴史的・文化的・社会的意義がより鮮明になり、ひいては中央ユーラシアにおけるシルクロード交易を取り巻く定住・遊牧両社会の相互関係とその変遷がより一層明らかにされるのを願うばかりである。